（8 月 30 日）「詩編 98 編」
新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた。右の御手、聖なる御腕によって　主は救いの御業を果たされた。
（詩編 98 編 1 節）

・「主は世界の王」：ほめ歌えの賛歌です。聖歌 535 番にこのような歌があります。「あなうれしわが身も　主のものとなりけり　沸き出づる喜び　あまつ世のまぼろし　歌わでやあるべき　救われし身のさち　たたえでやあるべきみ救いのかしこさ」。
・神さまは驚くべきみ業を成し遂げられます。その恵みを新しい歌に乗せて、賛美するのです。琴やラッパ、角笛を響かせながら、その喜びの輪にすべての人が加わるように、わたしたちも歌声を響かせるのです。
・そしてこの詩の思いが、聖歌 69 番「もろびとこぞりて」に引き継がれていきます。降臨節の最後によく歌われるこの歌は、神さまのみ業をほめたたえます。「主は来ませり！」と全地のすべてと共に、喜び祝うのです。

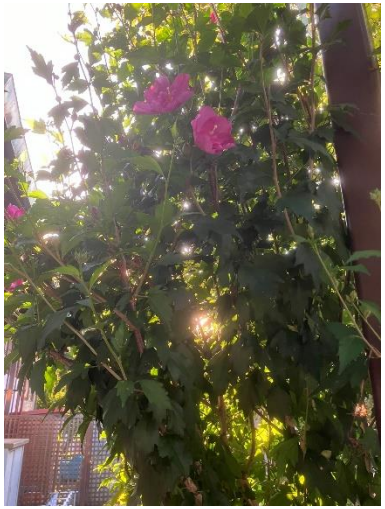
（8 月 31 日）「詩編 99 編」
我らの神、主をあがめよ。その足台に向かってひれ伏せ。主は聖なる方。
（詩編 99 編 5 節）

・「主は聖なる王」：主を王としてほめ讃える賛歌です。「聖なる」という言葉があります。キリスト教で「聖」とは、「他と区別されたもの」という意味になります。「俗」であるわたしたちとは区別されるべき存在、それが「聖なる方」である神さまです。
・聖歌 338 番に、このような歌があります。「聖なる主の霊は　この世界に心を開き　みそばに行く　罪なき主に　見守られて　われらは安らかに　み手のうちに」。聖である神さまはわたしたちを導かれます。
・その聖なる霊に見守られていることを知り、わたしたちは「主をあがめよ」と勧告に応えることができるのです。神さまはモーセやアロン、サムエルの時代から、呼ぶ者に応えられてきました。だからわたしたちも、主の御名をよぶのです。

2025 年 8 月

詩　編　　通　読

8 月



（8 月　1 日）「詩編 86：1～10」
苦難の襲うときわたしが呼び求めれば　あなたは必ず答えてくださるでしょう。
（詩編 86 編 7 節）

・「保護と導きを求める祈り」：救いを求める祈りです。この詩には、大きな特徴があります。それはオリジナルな部分が少なく、大部分が他の詩編やテキストで構成されているということです。
・作者はこの詩を作成するにあたり、個人的なことは書かずに他の詩を流用することにしました。それは「盗作」と思うかもしれませんが、違います。作者の意図は、「誰もが祈ることのできる詩を作る」ことにあったのです。
・聖公会で用いている礼拝の式文や諸祈祷をみてみると、ほとんどが詩編を含む聖書からの引用です。様々なテキストを用いながら、どのように祈るべきかを示しているのです。わたしたちはそれをベースにしながら、個人的な祈りを加えていくのです。

（8 月　2 日）「詩編 86：11～17」

神よ、傲慢な者がわたしに逆らって立ち　暴虐な者の一党がわたしの命を求めています。彼らはあなたを自分たちの前に置いていません。

（詩編 86 編 14 節）

・昨日の箇所でも触れたように、この詩は誰でも祈ることのできる、礼拝式文のような要素を持ちます。呼びかけ（1～7 節）から始まり、神の特性を告げ（8～10 節）、備えを求め（11～13 節）、困難について書き（14 節）、神さまのいつくしみを求める（15～17 節）のです。

・この流れは、救いを求める祈りの神学的模範とも言われます。特にここで注目したいのは、備えを求める記述です。特に 11 節にあるように、「お教えください」、「お与えください」と神さまに願うのです。

・わたしたち人間は、弱い者です。しかしその弱さを知りながら、自分の力で何とかしようともがいてしまいます。そんなときに、神さまに委ねることがとても大切なのです。なぜなら神さまはわたしたちに、良き道を必ず備えてくださるのですから。

（8 月　3 日）「詩編 87 編」

「わたしはラハブとバビロンの名を　わたしを知る者の名と共に挙げよう。見よ、ペリシテ、ティルス、クシュをも　この都で生まれた、と書こう。

（詩編 87 編 4 節）

・「万民の母シオン」、シオンの歌です。シオンとはエルサレム地方の歴史的地名です。神さまは世界を治めるときのためにシオンを選ばれ、そのシオンにご自分の都エルサレムを建てられたというのが旧約聖書の理解です。

・イスラエルの民同様、シオンも神さまから一方的に選ばれました。しかし現在住んでいる人たちのことを思うと、そのことを単純に受け入れることは難しいです。そしてイエス様は、わたしたちは新しいエルサレムへと招かれます。

・詩編にはラハブ（エジプトのこと）やバビロン、ペリシテやクシュ（エチオピアのこと）のようにイスラエルと敵対していた人たちも、選民に加えられたと書かれます。たとえどこに住んでいようとも、神さまから生まれたことには違いがない、そういうことです。

（8 月 28 日）「詩編 97：1～6」

主こそ王。全地よ、喜び躍れ。多くの島々よ、喜び祝え。

（詩編 97 編 1 節）

・「王である主の正しい裁き」: 主を讃美する賛歌です。1 節で作者は「主こそ王」と宣言し、「喜び踊れ」、「喜び祝え」と促します。そして 2～5 節には神さまによってなされることの描写が続きます。

・「正しい裁き」と聞くと、わたしたちはどう思うでしょうか。自分は裁かれる側かもしれないと恐ろしさを感じる人もいれば、早く敵対している人たちを滅ぼしてほしいと願う人もいるかもしれません。当時のユダヤでは、後者の考え方が主流でした。

・キリスト教では、本来裁かれるべきわたしたちを救うために、神さまはイエス様を遣わされたと考えます。正しい裁きの前にうなだれるしかなかったわたしたちが救われる。だからわたしたちは「喜び踊り、喜び祝う」のです。

（8 月 29 日）「詩編 97：7～12」

シオンは聞いて喜び祝い　ユダのおとめらは喜び躍る　主よ、あなたの裁きのゆえに。

（詩編 97 編 8 節）

・8 節にシオン（エルサレム）とユダという地名が出ています。この当時、裁きの中で救いに与るのは、主こそ自分たちの神であると知っていた人たちだけだと考えられていました。その人たちだけが喜ぶことできると思われていたのです。

・しかしその救いは、すべての人たちに向けられます。神に従う人のために、心のまっすぐな人のために、光を、そして喜びを与えてくださるのです。そこには民族の違いや血統などは関係ありません。

・97 編には 1、8、12 節の 3 箇所に、「喜び祝う、喜び踊る」という言葉があります。わたしたちが礼拝をするのも、喜びを神さまの前にあらわすためです。礼拝が終わった後、みなさんはどのような表情をしているでしょうか。

（8 月 26 日）「詩編 96：1～10」
国々にふれて言え、主こそ王と。世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない。主は諸国の民を公平に裁かれる。
（詩編 96 編 10 節）

・「主は宇宙の王」：主の王権をたたえる賛歌です。聖歌 311 番にこのような歌があります。「天(あま)つ　み使いよ　イエスのみ名の　力をあおぎて主とあがめよ　力をあおぎて主とあがめよ」。
・これが 1 節ですが、詩編 96 編の 1～2 節と通じるところがあります。主がわたしたちの王となり、わたしたちを治めてくれる。そのことを賛美するのです。御救いの良い知らせ（福音）を、国々に語り伝えるのです。
・7～8 節には「帰せよ」という言葉が 3 回出てきます。ルカによる福音書 15 章 11～32 節の「放蕩息子のたとえ」を思い起こします。わたしたちは神さまに立ち帰り、「主こそ王」だと宣言することが大切なのです。

（8 月 27 日）「詩編 96：11～13」
主を迎えて。主は来られる、地を裁くために来られる。主は世界を正しく裁き　真実をもって諸国の民を裁かれる。
（詩編 96 編 13 節）

・この詩編 96 編を題材とした聖歌に、303 番があります。「賛美と感謝」のカテゴリーの最初に出てくる歌ですが、礼拝で用いられることは少ないように思います。その理由はこの曲が、短調で暗めだからなのかもしれません。
・「わが心は賛美に満ちる　驚くべき主の賜物　み力受け感謝ささげ　尊き主の愛たたえよ」という言葉は明るさに満ちていますが、13 節に「裁き」という言葉が三度出てくるように、そこには畏れもあるようです。
・ただこの「裁き」という言葉は、「地を治める」という意味で使われています。この詩編 96 編がクリスマスやそのイブに用いられていることを思うと、暗闇の中に光を与え、この地を愛で満たそうとする神さまの思いを感じることができます。

（8 月　4 日）「詩編 88：1～10」
あなたはわたしから　親しい者を遠ざけられました。彼らにとってわたしは忌むべき者となりました。わたしは閉じ込められて、出られません。
（詩編 88 編 9 節）

・「暗闇からの祈り」：救いを求める祈りです。この詩編には誓いや神さまへの賛美、信仰告白が書かれていません。あるのは「願い」だけです。友人からも隣人からも見捨てられ、暗闇に落とされた中での願いです。
・暗闇は怖いものです。作者は主の怒りによって、そのような状態になったのだと理解します。暗闇と聞くとわたしは、クリスマス物語の羊飼いを思い起こします。彼らは暗闇にいました。それは彼らが罪深いからだと、人々は思っていました。
・しかしそこに、輝く光が与えられたのです。暗闇の中で祈るときに、自分の弱さや汚れを認めながら願い続けるときに、神さまは必ずそのみ手を差し伸べてくださいます。光を与えてくださるのです。

（8 月　5 日）「詩編 88：11～19」
愛する者も友も　あなたはわたしから遠ざけてしまわれました。今、わたしに親しいのは暗闇だけです。
（詩編 88 編 19 節）

・「沈黙」という遠藤周作の小説をご存じでしょうか。2016 年には「沈黙-サイレンス-」という映画にもなりました。キリシタン禁令の時代、宣教師ロドリコやキチジローといった人物の信仰が問われる作品です。
・小説の中で、イエス様が語りかける場面があります。「わたしは沈黙していたのではない。お前たちと共に苦しんでいたのだ」、「弱いものが強いものよりも苦しまなかったと、誰が言えるのか」。
・苦しみの中にいるときに、わたしたちは周りが見えなくなります。でもそこには、必ずイエス様がいてくださると信じています。イエス様はわたしたちのそばにいて、一緒に苦しみ、涙を流しておられるのです。

（8 月　6 日）「詩編 89：1～5」

主の慈しみをとこしえにわたしは歌います。わたしの口は代々に　あなたのまことを告げ知らせます。

（詩編 89 編 2 節）

・「ダビデへの約束の実現を祈る」：イスラエルの民の祈りです。表題にあるエズラ人エタンとは、ソロモン宮殿の賢人だそうです。この詩の中では、ダビデとの間に結ばれた契約の誓いについて、語られていきます。

・聖歌 403 番「いともかしこし　イエスの恵み」が好きだという方は多いと思います。繰り返しの部分、「世にあるかぎりイエスの栄えと　いつくしみとを語り伝えん」という言葉は、この詩編の 2 節を思い起こさせます。

・この詩編が賛美しているのはイエス様ではなく主ですが、今日から始まる長い詩編の最初に神さまへの賛美をするのです。代々とこしえに、神さまを賛美していきながら、わたしたちもまた祈っていくのです。

（8 月　7 日）「詩編 89：6～13」

あなたはラハブを砕き、刺し殺し　御腕の力を振るって敵を散らされました。

（詩編 89 編 11 節）

・6 節から 9 節には、天上の会議の場面が書かれています。キリスト教は一神教だと言われますが、三位一体の神であったり、天使の存在であったり、聖なるものがいたりと、何だかよくわかりません。

・そして 10 節以下には、驚くべき神のみ業が語られます。ラハブというのは、混沌を司る竜だそうです。神話上の海の怪物らしいのですが、そのような巨大なものでさえ、神さまは鎮められたというのです。

・その故に、世界の基は据えられました。9 節にある「あなたの真実」という言葉は、「主のまこと」とも訳せます。神さまのまことが立てられる世界、それが「神の国」と呼ばれるものなのでしょうか。

（8 月 24 日）「詩編 95：1～7」

主はわたしたちの神、わたしたちは主の民　主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。

（詩編 95 編 7 節）

・「賛美と従順への誘い」：賛歌と神からの言葉です。この詩は、神殿に行って神さまを礼拝しようという誘いの行列の中で歌われてきました。救い主であり、偉大な王であり、牧者である神さまを賛美するのです。

・この詩編 95 編は、聖公会では朝の礼拝および朝の祈りの中で唱えられます。礼拝共同体として、「主はわたしたちの神」と宣言します。朝に神さまを賛美し、一日を始めていくのです。

・また聖歌集 4 番「けさもわたしの」の 2 節は、この 95 編 7 節からとられています。「けさもわたしのちいさい耳よ　主のみ言葉に聴き従え」と歌いながら、牧者である神さまの声を日々求めていきましょう。

（8 月 25 日）「詩編 95：8～11」

四十年の間、わたしはその世代をいとい　心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。

（詩編 95 編 10 節）

・昨日の箇所で、詩編 95 編は朝の礼拝で用いられていると書きました。しかし正確には、普段の朝の礼拝で用いられているのは 1～7 節だけで、今日読んでいる 8～11 節は特別なときだけ用いられています。

・祈祷書 20 頁にも書かれていますが、8～11 節は、①灰の水曜日、②大斎節中の金曜日、③聖土曜日、この①～③にあてはまる日にのみ読まれます。そして今日の箇所では、神さまが一人称形式で警告されています。

・「荒れ野のメリバやマサ」でしたこととは、出エジプト記 17 章 1～7 節に書かれている出来事です。彼らは神さまを試みました。わたしたちは大斎節の中で、神さまを試みるという過ちを犯してはいないか、いつも振り返るように促されているのです。

（8 月 22 日）「詩編 94：8～15」
いかに幸いなことでしょう　主よ、あなたに諭され　あなたの律法を教えていただく人は。
（詩編 94 編 12 節）

・8～11 節には、「愚か者」への叱責が続きます。なかなか厳しい言葉です。わたしたちはそのような言葉は、自分ではなく他の人に向けられていると考えることが多くあります。しかし果たしてそうでしょうか。
・わたしたちの「計らい」が、神さまの目に正しくないことはないでしょうか。自分の正しさに立って、わたしたち自身が「愚か者」になってはいないでしょうか。そうならないためにも、わたしたちは聖書を読み、祈ることが大事です。
・神さまに諭され、その教えに忠実な人を、神さまは決しておろそかにはされません。わたしたちが「愚か者」ではなく「祝福される者」になるために、神さまのみ声に聞き、歩んでいきましょう。

（8 月 23 日）「詩編 94：16～23」
主は必ずわたしのために砦の塔となり　わたしの神は避けどころとなり　岩となってくださいます。
（詩編 94 編 22 節）

・16～23 節には、信仰の告白が書かれていきます。聖歌 451 番「千歳の岩よ」という歌をご存じでしょうか。この歌はイギリスの四大賛美歌の一つだと言われています。英語では「Rock of ages」、永年の岩とも訳せます。
・「千歳の岩よ　わが身を囲め」という言葉が、1 節の最初と 3 節の最後に出てきます。その中で、「罪のけがれを洗いきよめよ」、「（わたしには）罪をあがなう力はあらず」、「み救いなくば生くるすべなし」と歌うのです。
・そして「世にあるうちも世を去るときも」、砦の塔、避けどころ、岩となって下さる神さまを頼るのです。「彼らを滅ぼし尽くしてください」という言葉には、抵抗を感じます。しかしわたしたちの弱さや不信仰を「敵」とするなら、受け入れることができるかもしれません。

（8 月　8 日）「詩編 89：14～19」
正しい裁きは御座の基　慈しみとまことは御前に進みます。
（詩編 89 編 15 節）

・この 15 節の言葉は、この詩編の中で一番重要な宣言だと言われます。まことの神さまがすべてのことを支配しておられる、そのことはわたしたちにとって、どのような意味を持つのでしょうか。
・天上での会議の内容が地上へと降ろされ、神さまの王権が確立されていきます。そのときにイスラエルの人々は、喜びの声をあげるのです。そしてイスラエルにいよいよ、王が立てられることになります。
・イスラエルの初代の王は、サウルでした。しかし彼は、イスラエルの人々を正しく導くことはできませんでした。そのため神さまは、新しい王を立てるのです。その王のことが、明日以降の箇所に書かれていきます。

（8 月　9 日）「詩編 89：20～26」
わたしはわたしの僕ダビデを見いだし　彼に聖なる油を注いだ。
（詩編 89 編 21 節）

・ここから 38 節までには、預言的約束が書かれていきます。ダビデが王となったのは、神さまによる導き以外の何物でもありませんでした。サムエル記上 16 章 1～13 節に、ダビデが選ばれる様子が書かれています。
・エッサイの子ダビデには、兄が 7 人いました。彼は末の子で、羊飼いでした。サムエルがエッサイの元に来たときにも、ダビデはその場におらず羊の群れの番をしていました。しかし神さまはそんなダビデを選ばれたのです。
・そして 38 節までには、ダビデが神さまから油注がれた王として、神さまが選ばれたことが書かれていきます。このことは、サムエル記下 7 章 4～17 節の「ナタンの預言」と内容が似通っています。神さまの一方的な選びというのが、とても強調されています。

（8 月 10 日）「詩編 89：27～38」
彼はわたしに呼びかけるであろう　あなたはわたしの父　わたしの神、救いの岩、と。
（詩編 89 編 27 節）

・ダビデに対する神さまの選びの故に、ダビデは神さまに対して、「あなたはわたしの父　わたしの神、救いの岩」と呼ぶことができます。イエス様も神さまのことを、「父よ」と呼んでいました。そして主の祈りの中で、「あなたがたもこのように祈りなさい」と言われます。
・ダビデの王権は、ダビデの子孫に引き継がれていきました。イエス様はダビデの子孫であるヨセフの息子として育てられました。そしてすべての人の王として、わたしたちにも関わってくださるのです。
・31～33 節には、ダビデの子孫の過ちが書き記されます。しかし神さまは、自らがダビデを王として選び、救いを約束された契約を忘れてはいません。イエス様がわたしたちの間に遣わされたのは、この契約を成就するためなのです。

（8 月 11 日）「詩編 89：39～46」
あなたは彼の若さの日を短くし　恥で彼を覆われた。
（詩編 89 編 46 節）

・この 39 節から、作者は神さまの約束にもかかわらず辛い状況にある現在のことを書いていきます。ダビデの契約とは大きく矛盾した状況を嘆き、油注がれた者までも敵に打ち負かされている現実を悲しんでいるのです。
・果たしてダビデとの契約は、破棄されてしまったのだろうか。そのように人々は思います。しかしその根底には、ダビデの子孫が何度となく過ちを繰り返したという歴史的事実があるわけです。
・46 節に「あなたは彼の若さの日を短くし」とあります。ユダヤでは、長寿であることは神さまの祝福でした。聖書に書かれている人物の多くが長生きなのはそのためです。しかしイエス様は 30 歳台で十字架につけられました。わたしたちの本当の王となるためです。

（8 月 20 日）「詩編 93 編」
主よ、あなたの定めは確かであり　あなたの神殿に尊厳はふさわしい。日の続く限り。
（詩編 93 編 5 節）

・「力ある宇宙の王」：賛歌です。冒頭にある「主こそ王」という言葉が、この詩のテーマになっています。昔から人間は、神さまをどうにかして描きたいと考えてきました。洞窟にある壁画や中世の絵画など、様々な形で伝えようとしてきました。
・しかし目に見えない方をビジュアルで伝えることには限界があります。そこでこの詩編のように、言葉によって神さまを生き生きと描き出すのです。神さまは年月で計ることなどできず、またわたしたちが空間と知っているところよりもはるかに高い場所におられるのです。
・旧約聖書の創世記 11 章には、バベルの塔の物語が載せられています。当時の人たちは、神さまを超えたと勘違いし、高い塔を建てていきました。しかし神さまは、わたしたちの想像をはるかに超えた方なのです。

（8 月 21 日）「詩編 94：1～7」
主よ、逆らう者はいつまで　逆らう者はいつまで、勝ち誇るのでしょうか。
（詩編 94 編 3 節）

・「悪は悪人に返される」：救いを求める祈りです。1 節に「報復の神」という表現が繰り返し出てきます。報復という言葉には、あまり良いイメージがありません。テロへの報復や報復関税など、あまりよい言葉ではないようです。
・しかし元々この言葉は、預言者たちの間で使われていたものです。そしてその意味は、法的な範疇で正義を回復することなのだそうです。「目には目を」という言葉がありますが、その本来の意味は「受けた以上にやり返すな」ということです。
・聖歌 323 番の 3 節に、このような歌詞があります。「この世はみな神の世界　悪の勢いが世に満ちても　わが心に迷いはなし　主こそがこの世を治められる」。わたしたちは神さまにすべてを委ね、主の平和を求めていきたいものです。

（8 月 12 日）「詩編 89：47～49」
いつまで、主よ、隠れておられるのですか。御怒りは永遠に火と燃え続けるのですか。
（詩編 89 編 47 節）

・「あのとき、こんな約束したの、覚えてる？」と誰かに聞くことがあるでしょう。たいていの場合、こちらがうれしくなるようなことほど、相手は覚えていないものです。しかし神さまはどうでしょうか。
・作者は、昔ダビデと交わされた約束を思い起こしてもらいたいと神さまに叫びます。「いつまで待てばいいのですか？」、その問いは、わたしたちにも通じるものがあります。「明日まで我慢すれば」など、期限が決まっていたら少しは心も楽になります。
・しかしいつ光が戻って来るのか予想もできないとき、人の心はなかなか前向きにならないものです。大震災や戦争で、そのような思いを持っている方も多くおられます。わたしたちはその人たちのために、何ができるのでしょうか。

（8 月 13 日）「詩編 89：50～53」
主よ、真実をもってダビデに誓われた　あなたの始めからの慈しみは　どこに行ってしまったのでしょうか。
（詩編 89 編 50 節）

・「あなたの始めからの慈しみは　どこに行ってしまったのでしょうか」、この叫びこそが、作者が一番言いたかったことなのかもしれません。これは願いというよりも、神さまに対する抗議のようにも感じます。
・「どこに神さまはいるのか？」と思うことがあります。それどころか、「神さまはいないのではないか？」とさえ感じることもあります。目に見えない存在だからこそ、強い信仰が必要になってくるのでしょうか。
・しかしきっといつの日か、神さまを感じるときが来ます。光や温かさ、柔らかい風、誰かの言葉の中で、いろんな形で神さまはわたしたちに語りかけてくださるのです。73 編から始まった詩編第 3 巻は、ここで終わりです。明日から第 4 巻へと入っていきます。

（8 月 18 日）「詩編 92：1～7」
朝ごとに、あなたの慈しみを　夜ごとに、あなたのまことを述べ伝えることは
（詩編 92 編 3 節）

・「神に感謝することは素晴らしい」：感謝の歌です。日本聖公会聖歌集には 580 曲の聖歌が収められていますが、それは様々なカテゴリーに分けられています。最初に出てくるのは、「日々の礼拝」です。
・「日曜日」ではなく、「日々」というのが重要なところです。毎日の生活の中で、朝、昼、夕、就寝前に祈ることが大切なのだと伝えているのです。今日の箇所は聖歌 27 番で用いられています。
・「今日もまた恵みのもとに日は過ぎて　喜びささぐ夕べの祈り」、1 節だけの短い聖歌ですが、その日の終わりに神さまに感謝をささげていくのです。朝ごとに、夕ごとに、主に感謝し、御名をほめたたえることは楽しいことなのです。

（8 月 19 日）「詩編 92：8～16」
主よ、あなたに敵対する者は、必ず　あなたに敵対する者は、必ず滅び　悪を行う者は皆、散らされて行きます。
（詩編 92 編 10 節）

・この詩の中では、「神に逆らう者」と「神に従う人」が対比されて描かれます。神さまに逆らい悪をおこなう人は、野の草のように茂り花を咲かせるように見えても、永遠に滅ぼされるそうです。
・雑草は分かりますが、花も焼かれると思うと少し寂しい気がします。ただここでは、大きさに目を向けてみましょう。神に従う人がたとえられたなつめやしは、常葉樹で 30m ほどになるそうです。レバノン杉も 35m ほどに成長するそうです。
・きれいで目を引き、身近にあって手が届きそうなのは草花です。それに対して大木は、鳥の巣になり人に木陰を与えます。わたしたちはどうあるべきでしょうか。「主よ、あなたこそ、永遠に高くいます方」と伝え続けましょう。

（8 月 14 日）「詩編 90：1～10」
人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても　得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。
（詩編 90 編 10 節）

・「神の永遠性と人生のはかなさ」：救いを求める共同体の祈りです。この詩編 90 編から、第 4 巻が始まります。この詩は「神の人モーセの詩」と書かれていますが、この記述があるのはこの詩編だけです。
・この詩編 90 編は、お葬式のときに用いられることが多くあります。わたしたち人間を含め、すべての生きる者はいつか死を迎えます。「塵にすぎないお前は塵に返る（創 3：19）」と神さまが命じられた通りです。
・ではわたしたちは死の前にして、嘆くしかないのでしょうか。わたしは牧師として、たくさんの方々が愛する人の死の前に嘆き悲しむ姿を見てきました。その中で神さまはどのように働いてくださるのか、そのことをお伝えできればと思います。

（8 月 15 日）「詩編 90：11～17」
あなたがわたしたちを苦しめられた日々と　苦難に遭わされた年月を思ってわたしたちに喜びを返してください。
（詩編 90 編 15 節）

・昨日の箇所でも書きましたように、この詩編 90 編はお葬式の中で用いられることが多いものです。11～12 節で作者は、嘆きから願いへと方向転換します。わたしたちは死ぬべきものではありますが、それ以前に神さまの僕(しもべ)なのです。
・わたしたちはこの世の生涯の中で、多くの悲しみに出会います。しかしその中において、神さまがいつも共にいて下さることを知るのです。さらに神さまは、肉体の死を迎えたわたしたちの魂を、優しく憩わせてくださるのです。
・この詩編は、悲しみの中で聞かれることが多いでしょう。しかしそこには、確かな希望があるのです。「わたしたちの手の働きを確かなものにしてください」と、願い続けたいと思います。

（8 月 16 日）「詩編 91：1～13」
主に申し上げよ　「わたしの避けどころ、砦　わたしの神、依り頼む方」と。
（詩編 91 編 2 節）

・「主の翼のもとに」：王の詩編です。1 節にある「いと高き神のもとに身を寄せて隠れ　全能の神の陰に宿る人よ」とは、主なる神さまに全幅の信頼を寄せている人たちのことを示しています。
・この詩編はそのような人たちに対し、何が信頼に値することなのか、また何がわたしたちを恐怖から解き放つのかを伝えます。神さまはわたしたちの避けどころであり、砦であると言うのです。
・わたしたちには、苦しみや艱難が襲いかかります。それこそ四方八方から襲われる感覚になることもあるでしょう。そのときに神さまは大盾、小盾をわたしたちの周りに置き、そしてみ翼の下に守って下さるのです。そのような方を、わたしたちは信頼するのです。

（8 月 17 日）「詩編 91：14～16」
彼がわたしを呼び求めるとき、彼に答え　苦難の襲うとき、彼と共にいて助け　彼に名誉を与えよう。
（詩編 91 編 15 節）

・この 14 節から 16 節は、誰かが語った言葉として「　」に入れられています。この言葉を語られたのは、他でもない神さまです。神さまは一人称で、ご自分を慕う人たちにこの宣言をなされます。
・「災いから逃れさせよう」、「高く上げよう」、「彼に答え」、「彼と共にいて助け」、「名誉を与えよう」、「彼を満ちたらせ」、「救いを彼に見せよう」。これらの言葉は、神さま自身のものだということです。
・わたしたちにも、神さまのこれらの声が届けられているのです。はっきりと聞こえることはないかもしれません。しかしわたしたちが神さまにすべてをお委ねする限り、神さまはその信仰を認めてくださるのです。